

「特定有人国境離島地域の地域社会の維持の施策推進に関する分科会」（座長 大正大学地域構想研究所 清水慎一教授）では、特定有人国境離島地域における雇用の機会の拡充につながる産品開発や観光振興等に関して、地域が実践すべき工夫、認識しておくべき視点などについて議論を行い、様々な創意工夫により活性化に取り組んでいる事例をもとに、具体的な提言をとりまとめました。

I 産品の販路拡大・ブランド化に関する提言

1 ブランドの確立と地域商社による販売

- ・島根県西ノ島町では、地元産品の白イカについて「由良比女命にお詫びをするために白イカは群れとなり、西ノ島の由良の浜に押し寄せた」という伝説があり、こうしたストーリーとともに売り出すことが効果的である。
- ・長崎県青島では、島民全員参画による地域商社の一般社団法人「青島O(マル)」を設立し、地域水産物の販路拡大等に取り組んでいる。

2 産品の付加価値向上

- ・鹿児島県十島村では、急速冷凍装置と三枚おろし加工機械を導入し、雇用の創出とともに産品の付加価値向上に成功している。

3 消費地である本土との連携強化

- ・島根県海士町では、離島の食材で料理を提供する店舗「離島キッチン」を東京に開設している。海士町のみならず、全国の離島の食材・料理を提供しており、これにより、島のことを知り、実際に島を訪問する人も出てきている。

III 研修・教育など交流に関する提言

1 離島留学生の受入、大学生の離島訪問など若者の交流を促進

- ・島根県立隠岐島前高校では、地域を生かしたカリキュラムや公立塾と連携した教育などにより、島内からの進学も、本土からの留学生も増加した。高校までの段階で島のことを知っておくことで、大学で島を学びたいという意欲につながる。

2 企業研修や生涯学習の実施

- ・島根県海士町では、「巡の環」というターナーが立ち上げた民間企業が、島で企業研修を開催している。JICAとの連携により海外の行政官も研修にきている。離島だからこそ残されている文化、それに基づく景観、コミュニティのあり方など、離島には学びになる要素がある。

3 離島で活動する人材の育成

- ・東京都八丈町では、大人の学び場「八丈島熱中小学校」を開校した。各地で地域課題を解決する人材の育成、交流人口の増加に取り組んでいる。

II 観光に関する提言

1 国境離島の独自性をテーマにした観光

- ・古代から中国や朝鮮半島との中継地点であった対馬は、日本の交通の要地として栄えてきた歴史がある。

2 地元食材を使った食事の提供

- ・新潟県佐渡市では、冬季の観光として、寒ブリ、ノドグロ、活ズワイガニ及び牡蠣を食べる二泊三日のツアーを募ったところ、参加人数限定の販売であったが、2週間程度で完売するほど盛況であった。

3 多様性、高品質の観光

- ・長崎県小値賀町では、東洋文化研究者のアレックス・カー氏によって古民家改修が行われ、宿泊施設として素泊まり1万円を超える高価格帯での顧客獲得に成功している。

4 地域の伝統文化・営みの観光化

- ・鹿児島県十島村では、村の伝統文化である狂言(口之島)やボゼ祭りを観光客に体感してもらう観光ツアーを行っている。

5 観光客のターゲット・ニーズの明確化

- ・石川県船倉島、山口県見島、長崎県対馬では、渡り鳥、珍鳥、迷鳥のバードウォッチングのメッカとして毎年たくさんのバードウォッチャーが訪れる。

6 日本版DMOの役割

- ・長崎県小値賀町では、民泊を活用した教育旅行を誘致してきた。その際に観光協会、自然学校、民泊組織等を一本化してNPO法人「おぢかアイランドツーリズム協会」を発足させ、日本版DMOの基礎となった。

7 交通機関の工夫

- ・北海道利尻・礼文のハートランドフェリーでは、ボーディングブリッジを設置し、高齢化対策、観光客へのホスピタリティーの向上を図っている。また、夏の観光シーズンに船内のラウンジ等にあるモニターで利尻島・礼文島の観光映像を上映している。